



TITLE:

過去ニ於ケル和蘭ノ植民の活動(佐藤四郎氏編著『蘭領印度植民史』ヲ讀ミテ)

AUTHOR(S):

山本, 美越乃

CITATION:

山本, 美越乃. 過去ニ於ケル和蘭ノ植民の活動(佐藤四郎氏編著『蘭領印度植民史』ヲ讀ミテ). 經濟論叢 1916, 3(4): 597-601

ISSUE DATE:

1916-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127090>

RIGHT:

京都市帝國大學法科學大

經濟叢論

第四號

第三卷

故法學博士井上密君肖像并哀辭

論說

對露輸出代金決濟方法

國防稅ノ當否(三、完)

代表紙幣ト獨立紙幣(二)

課稅ト獨占價格(一)

戰後ノ人口增加政策(三)

保險本質論(二、完)

雜錄

重子 在外正貨問題ナ 河津博士ニ答フ

公營造物ニ關スル美濃部鐵山松本三博士ノ所論
ヲ讀ミテ東京市電車舊乘車券問題ニ及ブ(一)

支那ニ於ケル人口過剩論ノ梗概

移民政策ニ對シテ邦人同化問題

村落共產體ノ發達

らぐれー『ミール』學說ノ研究(三、完)

過去ニ於ケル和蘭ノ植民の活動

神惟孝ノ事ニ就キ 鈴木券太郎氏ニ答フ

漬物机上觀

法學博士 戸田 海市

法學博士 神戶 正雄

法學士 作田 莊一

文學士 高田 保馬

法學士 米田 庄太郎

法學士 小島 昌太郎

法學博士 神戶 正雄

法學博士 福田 德三

法學博士 鈴木 券太郎

法學士 山本 美越乃

法學士 本庄 榮治郎

商學士 大塚 金之助

山本 美越乃

瀧本 誠一

法學士 財部 靜治

(載 轉 禁)

過去ニ於ケル和蘭ノ
植民の活動

(佐藤四郎氏編著『蘭領印度植民史』
ヲ讀ミテ)

山本美越乃

近世ノ植民國中西班牙及ビ葡萄牙ニ次デ一異
彩ヲ放テルモノハ和蘭ニシテ、和蘭人ハ夙ニ歐

洲ノ北部ニ於テ通商航海ノ業ニ從事シ、政治上及ビ宗教上ノ壓制ニ對シテハ極力反抗ヲ試ミタル自由思想ニ富メル國民タリ、彼ノ和蘭對西班牙間ニ於ケル紛争ノ如キモ、史家ハ之ヲ以テチヨリ・どんな人種對羅典人種ノ鬭争トナスモ、一面ヨリ之ヲ觀察スル時ハるゝかす氏ノ言ヘルカ如ク、民主主義ト專制主義、新教主義ト舊教主義、國際通商主義ト鎖國大陸主義トノ争ヒニ他ナラズ、換言セバ古代ノ王政、教會組織及ビ貴族政治ニ反對シテ、近世ノ中等社會階級ヲ擁護センガ爲メニ鬭ヘルモノト云フモ不可ナシ。西班牙及ビ葡萄牙人等ハむゝあ人ト戰フテ攻伐的ニ植民事業ヲ成就シタリト雖ドモ、和蘭人ハ政治上及ビ宗教上ノ獨立自由ヲ得ンガ爲メニ西班牙ト鬭フテ、終ニ海上ニ雄飛スルノ機會ヲ得タリ。西班牙及ビ葡萄牙ノ全盛時代ニ在リテハ是等ノ兩國ハ全世界ヲ二分シ、他ノ諸國例ヘバ和蘭・佛蘭西・英吉利等ノ如キハ、彼等ノ有セル大植民地間ニ僅カニ小植民地ヲ開拓シ得タルニ過ギザリシガ、第十七世紀ニ入リテヨリ和蘭モ亦彼等ト

相對峙シテ、頗ル有力ナル植民國タルノ地位ヲ獲得スルニ至レリ、殊ニ一六六一年ヨリ一七四一年ニ至ル八十年間ハ、和蘭人ノ東洋ニ於ケル一大活躍ノ時期ニシテ、此ノ間ニ葡萄牙人ヲ印度ヨリ驅逐シ、進ンデ南太西洋及ビ印度洋ニ於ケル諸島ヲ略シ、更ニべるしや灣・ベンがる灣附近・びゆるま及ビ交趾支那地方ニ植民的ノ活動ヲ開始シ、終ニハ其ノ餘力ヲせいろん・まらつか臺灣等ニ延ベテ、支那及ビ日本ニ對スル通商貿易ヲモ獨占スルニ至レリ。

之ヨリ先キ一六〇二年ニハ和蘭東印度會社ヲ組織シテ、東洋及ビ南洋方面ニ活動ノ基礎ヲ置キ、一六一九年ニハジャバ島ニばたびや市ヲ設ケテ之ヲ蘭領印度ノ首府トナシ、又一六二一年ニハ和蘭西印度會社ヲ起シテ、米國及ヒ亞弗利加ノ西海岸ニ植民事業ヲ企テ、翌一六二二年ニハにゅーあむすてゐるだむ即チ現今ノ紐育市ノ開設ヲ見ルニ至レリ、西印度會社設立ノ目的ハ北米ニ新植民地ヲ獲ントスルヨリハ、寧ロぶらじゐるヲ領有センガ爲メナリシヲ以テ、一六二三年

* Lucas, C. P.: Introduction to a Historical Geography of the British Colonies, p. 74

和蘭艦隊ハ遂ニぶらじるニ航シテ其ノ北東海岸ヲ略取シタルト雖ドモ、南米ニ於ケル和蘭ノ勢力ハ僅カニ三十年間ノ命脈ヲ保チ得タルニ過ギズシテ、一六五四年ニ至リ再ビぶらじる人ノ手中ニ歸セリ、降テ奈翁戰爭ノ時ニ至リ、和蘭ハ佛國ト同盟シタルノ故ヲ以テ、英國ノ爲メニ植民地ノ大部分ヲ奪ハレシヨリ以來、漸次植民國トシテノ勢力ヲ失墜スルニ至レリ。*

和蘭及ビ葡萄牙ハ共ニ小國ヨリ興リ、通商航海的ノ國民的特性ヲ有シタル點ニ於テハ頗ル相似タルモノアリ、是等ノ兩國ハ互ニ西班牙ニ對スルガ如キ敵意ヲ有スルモノニアラズ、唯共ニ通商貿易ノ發展ヲ目的トナシタルヲ以テ、茲ニ端ナクモ、利害ノ衝突ヲ惹起スニ至レルニ過ギズ、當時西班牙ノ植民地ハ本國政府ノ壓制ニ堪エズシテ、葡萄牙ニ歸屬シタルモノ多カリシヨリ、和蘭人ハ海外各地ニ於テ西班牙人ヨリモ寧ロ葡萄牙人ノ驅逐ニ努メシガ、適マ蘭西兩國間ニ於ケル國際關係ノ斷絶ハ、英・蘭等ノ新進植民國ヲシテ其間ニ乗ジテ漁夫ノ利ヲ占ムルコトヲ

得ルニ至ラシメタルモノナリ。

和蘭ノ植民の活動ノ主タル目的ハ前述ノ如ク通商上ノ利益ヲ得ントスルニ在リシヲ以テ、海外各地ノ住民ニ接スルニモ常ニ平和的ノ交通ヲ維持センコトニ注意シ、又宗教上ニ於テハ新教ヲ擴張シテ、舊教及ビ回々教ヲ排斥センコトニ努メ、其ノ他羅典人種ハ植民地ニ於ケル各種ノ利權ヲ、國王父ハ政府ノ手中ニ收メントシタルニ反シ、ちゆいどん人種タル和蘭人ハ之ヲ私設ノ特許會社ニ委ネテ、其ノ活動ヲ一層敏活ナラシメンコトヲ期シタリ、此ノ如ク和蘭ノ植民の活動ハ當初ヨリ通商貿易ヲ主眼トナシタルヲ以テ、國民ノ團體的海外移住ノ如キハ彼等ノ意トスル所ニ非ラザリシナリ。

和蘭ガ假令一時的ナリシトハ謂ヘ、植民の活動ニ成功シタル所以ノモノハ、(一)攻伐主義ニ依ラズシテ専ラ通商貿易ニ重キヲ置キタルコト、(二)植民地ノ官吏ニ對スル監督比較の能ク行ハレ、相當ノ報酬ヲ與フルト共ニ私ニ營利事業ニ關與スルヲ禁止シタルコト、(三)當初土民ニ對

シテ一般ニ寛大ナル待遇ヲ與ヘタルコト等ニ原因セズンバアル可カラズ、然ルニ當時新進植民國トシテ和蘭ノ好敵手タリシ、英國ノ植民地ニ於ケル競争の勢力漸ク大トナルニ從ヒ、海外ニ於ケル和蘭ノ大會社ノ維持ハ、次第ニ困難ニ陥リ、隨テ植民の活動ノ唯一ノ目的タリシ通商貿易ノ衰退ト共ニ、自ラ土民トノ間ニモ感情上ノ疎隔ヲ生ジ、斯カル頽勢ヲ挽回センガ爲メニ、本國政府ハ屢々植民地官吏ヲ交代セシメタルコトハ却テ統治方針ヲ動搖セシメ、徒ラニ土民ニ不安ノ念ヲ起サシムルノ原因トナリ、加フルニ本國ニ於ケル政治組織ノ變遷、換言セバ外敵ヲ防ギ國力ノ充實ヲ計ランガ爲メニ、漸次中央集權ノ主義ヲ確立スルニ至レルコトハ、勢ヒ海外各地ニ散在セル植民地ニ關シテモ亦從來ノ如クニ熱心ナル注意ヲ拂フコト能ハザルニ至ラシメタリ。

此ノ如クニシテ現今和蘭ノ植民地トシテ殘存セルモノハ、蘭領東印度諸島(面積七十三萬五千方哩、人口約三千八百萬人)ヲ除キテハ、僅カニ

西印度ニ於テずりなむ即チ蘭領ぎあな(面積四萬六千〇六十方哩、人口約八萬六千人)及ビクダ(面積四百〇三方哩、人口約五萬七千人)アルニ過ギズ、就中蘭領東印度諸島ハ、其ノ地理上ノ關係ニ於テモ亦歷史上ノ關係ニ於テモ、現在及ビ將來ニ亘リテ我ガ國民ノ好發展地ヲ以テ目セラルベキニ拘ハラズ、從來未ダ多ク世人ノ注意ヲ惹クニ至ラザリシガ、歐洲大戰ノ結果ハ圖ラズモ南洋問題ノ支那問題ト共ニ、直接且急迫セル研究題目トシテ吾人ノ眼前ニ開展セラルルヤ、是等ノ地方ニ關スル著書モ亦俄カニ増加シ、吾人ノ知レル範圍ニ於テモ僅々十數箇月間ニ南洋ニ關スル刊行物ハ二十有餘種ノ多キニ上レリ、然レドモ是等ノ多クハ旅行記・見聞記ノ類ニ非ズンバ一部ノ風俗誌トシテ讀者ノ歡興ヲ惹クニ過ギズシテ、嚴密ナル意義ニ於テ參考ノ價值ヲ有スルモノハ寥寥五指ヲ屈スルニ足ラズ、然ルニ佐藤氏ノ近著『蘭領東印度植民史』ハ從來ノ述作ト全ク其ノ選ヲ異ニシ、僅々百頁ニ滿タザル小冊子中ニ蘭領東印度ノ植民史上ニ於ケル重要ナ

ル事蹟ヲ、流麗ナル筆ヲ以テ極メテ簡潔ニ叙述シ、間間補フニないやゝきよぶなゝゝあじやゝさんゝるゝかすゝらんちゝでい等ノ植民學者ノ所説ヲ以テセリ、唯著者自ラ卷頭ニ序セルガ如ク、本書ハ固ト臺灣日日新報紙上ニ登載シタルモノヲ一括シテ“book-form”トナシタルヨリ、全編ヲ通ジテ組織的ノ脈絡ヲ缺ケルト、參考ニ資ス可キ計數的ノ説明等ニ對シテ其ノ出所ヲ明ラカニセザルトハ、讀過直チニ感ジ得ベキ缺點ナリト雖ドモ、這ハ本書刊行ノ由來ニ溯リテ考フル時ハ必ラズシモ深ク之ヲ咎ムルノ要ナカルベシ、南洋殊ニ蘭領東印度ノ眞面目ナル研究者ニトリテハ、曩ニ外務省通商局ニ依リテ公ケニセラレタル『蘭領東印度之產業』ト共ニ、近時ノ好資料トシテ之ヲ江湖ニ薦ムルヲ憚ラズ。